

山口県立大学 郷土文学資料センターだより

郷土文学資料センター長の退任に当たって

稲田 秀雄 (郷土文学資料センター・センター長)

今年度(2022年度)をもって、定年退職を迎えることになりました。当センターの所長(後、センター長)は、2004年4月、熊本守雄先生(現・名誉教授)より引き継いで以来、この3月末まで19年間務めたことになるわけです。以下、この機会に、今までの活動を少しばかり振り返っておきたいと思います。

本紙『郷土文学資料センターだより』の創刊は、2003年4月のことでした。センターの活動を学内外に知っていただくこと、当初は学内の印刷機で印刷していました。私自身は、その第3号(2004年5月)に「当センターが、山口の風土に育まれた文学を媒介としつつ、地域と県立大学を結ぶ絆の一つとして、よりよく機能するよう、今後とも努力する所存です」と書いています。このことを果たし得たかどうか、甚だ心もとない限りですが、研究員の皆さんの後押しにより、特に2006年の大学法人化以降、当センターも中期計画を策定して、いくつかの新事業に取り組みました。その2006年は、奇しくも当センターの設立20周年に当たり、本学講堂にて高樹のぶ子氏の講演を開催(5月15日)、また本学を会場とする公開講座(5月~9月)、それに関連する資料展示も行いました。それ以後、2011年度に設立25周年、2016年度には設立30周年記念行事を開催しています。

2008年3月20日の特別公演に端を発した、山口鷺流狂言の大学公演は、5回目(2013年1月)より、当センター主催・国際文化学部共催として安定的に運営されることになり、以後、2018年1月の第10回(最終回)まで、10年にわたって開催いたしました。当センター所蔵の鷺流狂言関係資料も、公演の際に講堂ロビーで展示や解説を行っています。法人化以降の新事業の中で、私にとっては最も印象深いイベントであったといえます。

公開講座(サテライトカレッジ)は、当センターの核ともいえる重要な事業として、設立以来実施されてきましたが、私自身も1999年9月の防府市を皮切りに担当させていただき、県内をくまなく回らせていただきました。2006年以後に限っても、光市、宇部市、岩国市由宇、阿武町、下関市、平生町、山陽小野田市、柳井市、宇部市楠、周南市、美祢市、岩国市などで講演を実施・担当しています。地域の皆様を対象とする講座は、まさに当センターと地域の「絆」であり、私にとっては貴重な勉強の機会となりました。

1994年、本学着任とともに当センター研究員となって以来、各方面から、多くの貴重資料の寄贈をいただいたことも明記しておかなければなりません。とりわけ、当センター運営協議会委員を長年務めてくださった故・和田健氏の旧蔵資料に関しては、山口市交流創造部文化交流課の仲介によって寄贈が実現したことは記憶に新しく、現在も加藤禎行当センター研究員を中心に、中原中也記念館館長の中原豊氏をはじめとする記念館スタッフのご協力のもと、整理・目録作成の作業が着々と進められています。

2020年9月、当センターは、北キャンパス3号館2階へ移転いたしました。今後はここが活動や資料保管の拠点となります。こうして振り返ってみても、当センターの事業はすべて、学部学科との兼務である当センター研究員各位、運営会議委員の先生方、そして郷土文学に深い愛情をもたれた地域の皆様の並々ならぬご尽力によって実現・実行されたものばかりです。最後にそのことを明記して、これまでの関係各位のご指導とご支援に対し深甚の謝意を捧げる次第です。本当に有り難うございました。



第8回鷺流狂言公演でのトーク、ロバート・シャルコフ教授(当時)と。



仲村 拓真 (郷土文学資料センター・研究員)

2022年4月に、山口県立大学国際文化学部文化創造学科に着任した仲村拓真と申します。同じく4月から、郷土文学資料センターの研究員をしています。私の専門は、図書館情報学、社会教育学で、近代日本図書館史を主に研究しています。

図書館は、文学となじみ深い存在です。今日、図書館に足を運べば、文学に分類された資料が、多く排架されていることに気づきます。

しかし、近代においては、文学、とりわけ、フィクションの取り扱い、図書館にとって、悩ましいものでした。近代の図書館界では、国民にとって、「有害」なものを排斥し、「健全」な教養を培うことのできる資料を備えることが重視されました。そのため、しばしば、共産主義に関する論考や「低俗」とされる文学作品は、議論の対象になってきました。

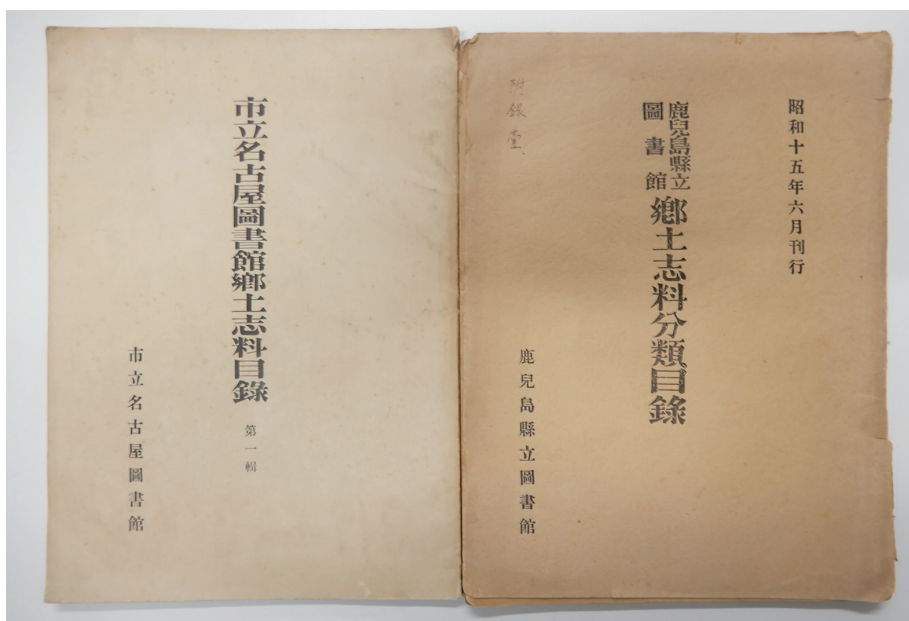
一方、利用者が求める資料には、文学が多かったため、活用される図書館を作りたければ、文学を多く備える必要がありました。そこで、いかに優れた文学作品を提供し、害あるものを排斥するかが、選書における課題とされてきました。しかし、判断基準として、文学史における記載の有無や、利用者の要求の程度が挙げられることがあるものの、どのような著作が図書館に備え付けるべきものなのか、判断することは難しかっただろうと推察されます。

さて、図書館では、郷土に関する資料は、郷土資料と呼ばれ、積極的に収集し、利用者に提供することが推奨されてきました。たとえば、山口県立山口図書館の初代館長であった佐野友三郎は、図書館界では極めて名の知れた人物ですが、その業績の一つとして、郷土資料の収集があります。具体的には、「地方図書館に在りては、郷土志料、即ち、地方の沿革及現状を徴すべき新旧資料、地方出身者の事績及著述を蒐集すべく又所在地の中等学校教科書及参考用書の如きも成るべく特別の書架に収めて公開すべし」と説き、「防長叢書」と称して、郷土資料を扱っていました（『通俗図書館の経営：山口県立山口図書館報告第式拾』山口県立山口図書館、1915、p. 11.）。

そして、佐野の記述にみられるように、各図書館では、郷土資料の一つとして、郷土文学を収集してきました。文学一般については、その価値が問われましたが、郷土文学については、比較的、取捨選択せずに扱うことが可能であったといえます。実際、ある程度の規模を有した図書館では、一般的な目録とは別に、郷土資料の目録を編成してきましたが、そのなかに、文学に分類された資料が列挙されているのを確認できます。

その後、図書館が郷土文学を収集することは、現代でも志向されてきたといえます。したがって、図書館は、郷土文学の保存や普及に、多少なりとも貢献してきたといえましょう。各図書館が、当該地域の郷土文学を保存すれば、結果として、

全国の郷土文学を保存することが可能になります。しかし、現実には、様々な課題があります。また、そもそも、なぜ、図書館が郷土資料に着目する必要があったか、それは、どのように管理され、利用されてきたかといった疑問は、いまだに追究されていないといえます。郷土文学と図書館をめぐる問題は、今後、着目していくべきテーマであるといえましょう。



近代日本に刊行された郷土資料目録（筆者所蔵）



詩誌『麓』と大塚康生

加藤 禎 行 (郷土文学資料センター・研究員)

二〇一九(平成 31)年三月、郷土文学資料センターに寄贈された和田健旧蔵資料から紹介する。『麓』という詩誌がある。判型はB5判で藁半紙に謄写版で印刷される。寄贈された現存資料は、第一号(一九五三(昭和28)年六月一四日)から通巻第一号(一九五四(昭和29)年八月一五日)までの一冊だ。創刊号奥付によれば「山口市湯田/国立湯田療養所内/麓詩会」からの発行であることが判る。国立療養所は、戦後に設立された医療施設で、国立湯田療養所の機能は国立療養所山陽荘と統合されて、国立療養所山陽病院(現在の国立病院機構山口宇部医療センター)となっているが、国立湯田療養所の敷地は、その施設を継承した現在の済生会湯田温泉病院の位置にあたっている。

そのページをめくっていると誌面に、大塚康生の名前があり気掛かりになっていた。大塚康生(一九三一(昭和6)年~二〇二一(令和3)年)は「未来少年コナン」(一九七八(昭和53)年)、「ルパン三世 カリオストロの城」(一九七九(昭和54)年)といった作品の作画監督で知られるアニメーション作家であり、著作に『ジープが町にやってきた 終戦時14歳の画帖から』(二〇〇二(平成14)年七月、平凡社)、『大塚康生の機関車少年だったころ』(二〇一六(平成28)年四月、クラッセ)などがある。島根県津和野町出身の大塚康生は、山口県山口市に暮らし、山口県職員を経て上京、一九五二(昭和27)年厚生省に勤め、翌年退職、東映動画に入社している。詩誌『麓』の刊行時期は、大塚康生の上京後であり、詩誌『麓』に掲載されている大塚康生名義の詩作品が、あのアニメーション作家大塚康生と同一人物なのかは判然としていなかったが、最晩年に出版された『大塚康生画集「ルパン三世」と車と機関車と』(二〇二〇(令和2)年七月、玄光社)収録の叶精二「大塚康生バイオグラフィー」では、この時期について、「不規則な生活が祟って結核を患い、2年間山口県に戻って療養生活。読書にふける。」という記述があり、これを同一人物と見てよいことが確認できた。

詩誌『麓』に確認できる大塚康生の詩作品は六篇で以下の通り。「パチンコ」(第三号)、「生活の音」(第四号)、「いまのところはそれですむ」(第五号)、「邦ちゃんの魂」(第二巻第一号)、「笑えない人たちえ」(第二巻第二号)、「天井のフシに喰いつけ」(第二巻第三号)。また随筆としては「『麓』のあり方について思うこと」に関連して(第二巻第三号)が掲載された。

特筆すべきは大塚康生による表紙画、カット図案も確認できることが挙げられる。「表紙画について 創刊号、第二号ともに麓誌にとってふさわしからぬものとは思いましたが、適者なきため私が描いた様な次第です/来月は大塚康生氏にお願いすることになりましたので御期待下さい/尚、今月号のカットは大塚康生氏をわずらはしました」(田中扶桑「編集後記」『麓』第二号、一九五三(昭和28)年八月一〇日)とあり、第二号カット図案、第三号表紙画、第五号表紙画、第二巻第二号表紙画・カット図案(この号は大塚康生が編集人を務める)、通巻第十号カット図案に、大塚康生の画業を見出すことができる。

大塚の詩「パチンコ」(『麓』第三号、一九五三(昭和28)年九月五日)は、全四連から成り、その第一連は「ホラ!! 耳をすまして聞いてみたまえ/四つの島からわきあがる/あの音を/銃声や うめき声や/叫び声のあい間に/たいはい的な唄にまじつてきこえる/あの重苦しい音は?」とうたわれている。麓詩会の顧問とも見るべき立場で詩誌『麓』に関わっていた、和田健は「第三号作品評」(『麓』第四号、一九五三(昭和28)年一〇月五日)で、「こうした詩の傾向を諷刺とも社会性のある詩ともいう。

いづれにしても作者の鋭い批判精神がうたいあげたものだ。本号の異色であろう。」と評している。詩誌『麓』は、病院内で発行された小さなサークル雑誌なのだが、思ってもみなかった異分野の人物からの寄稿を確認することができた。詩人和田健とアニメーション作家大塚康生との交流が、大塚の国立湯田療養所退院後、続いたのかどうかは今のところ定かではない。



麓第3号書影

寄贈図書 (2022年5月～2022年12月)

明日を紡ぐ大地の会上演台本『朗読劇いのちの道しるべ 種田山頭火の世界 前篇』、兼崎地橙孫顕彰会『地橙孫写真集』、中原中也記念館『特別企画展 坂口安吾と中原中也 一風と空と』

寄贈雑誌 (2022年5月～2022年12月)

『大内文化探訪』第40号(大内文化探訪会)、『其桃』第923～925号(「其桃」発行所)、『研究所年報』第14号(大妻女子大学草稿-テキスト研究所)、『神戸女子大学古典芸能センター紀要』第16号(神戸女子大学古典芸能研究センター)、『小宇宙』第9～10号(コスモス短歌会山口県支部)、『佐波の里』第50号(防府史談会)、『秋芳町地方文化研究』第58号(秋芳町地方文化研究会)、『すばる』第57号(すばる俳句会)、『大地通信』第43号(明日を紡ぐ大地の会)、『中原中也研究』第27号(中原中也の会)、『颯』第120号(颯文学会)、『風響樹』第55号(風響樹同人)『ふるさと通信 きずな』第15号(ふるさと紀行編集部)『文芸山口』第363～366号(山口文芸懇話会)、『やまなみ』第39号(やまなみの会)、『山彦』第169～172号(山彦発行所)

彙報

- ◆2022〈令和4〉年8月1日、郷土文学資料センター運営協議会委員の中原豊氏から、以下の、和田健氏旧蔵の雑誌『詩園』25冊を御寄贈頂きました。記してお礼申し上げます。1巻1号-3号、2巻2号-2巻8号(7号は複写)、3巻1号-3巻9号(5号は複写)、4巻1号-4号、5巻1号-2号、合計25冊。
- ◆2023〈令和5〉年1月22日(日)から4月27日(木)まで、山口県立大学郷土文学資料センターが山口県立山口図書館とともに主催する、企画展「没後10年、和田健の軌跡」(山口県立山口図書館2階ふるさと山口文学ギャラリー)が開催されています。どうかご来場くださいますようお願い申し上げます。

編集後記

長年、郷土文学資料センターの長をつとめてこられた稲田秀雄先生が、定年退職により、センター長の職も辞されます。よって退任にあたって当センターでの活動を振り返っていただきました。なお、稲田センター長は、2021年11月に刊行されたご著書『狂言作品研究序説』(和泉書院)および山口鷲流狂言保存会の顧問としての活動に対し、第44回観世寿夫記念法政大学能楽賞を受賞されました。お祝い申し上げますとともに、これまでのご尽力に対し心より御礼申し上げます。

また、弊社への着任に伴い、当センター研究員も兼務されることになった仲村拓真研究員にも、ご専門の図書館史の視点で、郷土資料についてご寄稿いただきました。今後の活躍もご期待ください。

さらに加藤研究員からは、詩誌『麓』とアニメーション作家・大塚康生についての原稿が寄せられ、本号はすべて当センターの構成員により紙面ができました。稲田センター長ご退任後も、新体制でひきつづき活動を行っていく所存です。今後ともよろしく願いいたします。(菱岡憲司)



■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター (〒753-8502 山口市桜畠 3-2-1)
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2023 (令和5) 年2月20日